

## 津山の月

へ美作や 久米の更山さら／＼に逢うて立つ名はいとわねど  
逢わで立つ名の恨めしや

へうすき契りの夏衣 都の宿に脱ぎ捨てて 慣れぬ旅寝の草枕  
いく山坂を越えたやら 君が命を長き夜の 月の津山に来てみれば  
山家の秋は早や更けて 木々の紅葉に鹿ぞ啼く ここにも妻  
を恋うやらんへ故郷ならぬ古里に 今は便りの文さえ絶えて身  
は空蟬のうつつなく もぬけの殻とやつれてもさらに得捨てぬ  
恋の道 思い暮らしてうか／＼と 月の山路をたどり来る

へお国じゃないか

へ山三さんか

へ逢いたかったと駆け寄って 先立つ涙あとや先 言葉は無く  
泣き交わす

へ人目忍ぶの通い路ならば 月にもゆく闇にもゆく 晴れて逢う  
夜はおもはゆや 山三思えば照る日も曇る 冴えた月夜も闇にな  
るへ我も昔は弓取りの 槍師やり師は多けれど 名古屋山三は一  
の槍小田原攻めの先駆けに 槍の山三とうたわれし 思い出も夢  
なれや

へ私の初めて見た主は 京一番の良い男 繻子の鬢付刷毛長に  
さても寛濶風流な 真紅下げ緒の長刀 面影はあるものを 誰が  
吹き分けて行く雲の 心へだつる旅衣

へとても住むなら浅茅の里に 機も織りましよ 砧も打とう更け  
て砧の音聞けば よその恋さえ気に掛かるやるせなや へ移り香  
残る対小袖 昔ゆかしきなりふりの 月にはとても寝られねば  
いざや踊り明かそうよ

へ揃うた／＼ 踊り笠 春は花笠 夏網代笠 秋の菅笠 冬めせき笠  
浮き世忍ぶの深編み笠も 姿形で若さは知れる 花に都の御所  
塗り笠よ 月の笑顔に照る紅葉笠 さても見事に揃うたり そこ  
で振り出せお手廻り 大事の前の居合い腰すんよし振りよし形  
もよし へ振りやれお振りやれ大鳥毛 槍は鎌槍十文字 おっと  
り揃えた長刀 名古屋山三の槍踊り おもしろや

へ有明の月毛の駒に片手綱 引き留めても止まらぬは 昔男やみ  
やび男の はやり乱るる恋の道芝